

会田弘継著

## 『破綻するアメリカ』

(岩波現代全書 岩波書店 2017年12月)

山城雅江

2016年米大統領選挙におけるドナルド・トランプの躍進以来、いわゆる「トランプイズム」を分析・理解・思考するための試みが続いている。アメリカでは、選挙直後から大手新聞社によってトランプ勝利を理解するための著作として紹介された既刊本がベストセラー入りし、その後も続々と関連書籍が刊行され、日本でも昨年からは今年にかけてそうした著作の一部が迅速に翻訳・出版された。ジャーナリズムも含め「トランプ現象」を直接的に扱うものだけでなく、その背景となっている新自由主義グローバリズムとその結果・現状を分析するもの、あるいは、世界で同時進行する動向としての「ポピュリズム」やアメリカの「伝統」でもある「反知性主義」といった主題を再検証するものなど、様々なアプローチの書籍が相次いで出され、アメリカで未だ衰える気配のない根強い支持やその影響について理解を深める契機を提供している。

アメリカで一体何が起きているのか—本書もこの(不安混じりの)問いに積極的に応答する著作であり、トランプ大統領誕生によって露わになったアメリカの分裂・混乱を政治・経済・文化・思想史の観点から検証したものとなっている。著者は、2016年秋の大統領選の前に、共和党予備選挙を席卷し同党指名候補となった事態を受けて、すでに『トランプ現象とアメリカ保守思想—崩れ落ちる理想国家』(2016年8月)を著し、アメリカの保守思想と現代政治史に照らし合わせてトランプ現象をいち早く議論していた。予備選の経緯やトランプという人物・経歴紹介など基本情報を収めつつ、保守政治・思想との関係を読み解いて、トランプ台頭という「衝撃」に即応した概説的著作となっていた。一方、本書『破綻するアメリカ』

の方は、経済的背景の詳細や「多文化主義」をめぐるリベラル派の動向・せめぎ合いについての章を設け「トランプイズム」に本質的な社会的係争点も扱うと同時に、著者の専門であるアメリカ保守思想史の文脈で更なる考察を展開し、その複雑な地勢図を丁寧に精査している。フランシス・フクヤマやラッセル・カークといった保守系思想家だけでなく、リベラル派論客マーク・リラの書籍の翻訳も手がけ、米政治思想を研究する著者ならではの検証を進展させた本書は、大統領選出以降の動きや分析も踏まえながら、「トランプイズム」に象徴される現代アメリカ社会の諸問題の本質や隘路を描き出している。

以下、各章の内容を略述してみたい。

序章「アメリカ衰退論の中で」は、大統領選挙中に話題になった匿名論客によるオンライン論考を糸口に、トランプ大統領誕生の土壌としてのアメリカ衰退論の浸透とその特徴を検討している。サミュエル・ハンティントンらの包括的整理をもとに、戦後アメリカにおける衰退論ブームの循環とその社会状況を概観、更には宗教的な終末思想との関連も示唆しつつ、トランプ政権を後押しする今日の衰退論の内容と広がりを確認する。衰退・危機の認識を強めることになった現状を経済、政治、思想の各方面から探ることが本書の目的として明示されている。

タイトルの通り「トランプ誕生の経済的背景」を検討する第1章では、様々な経済指標や何人もの研究者の分析を参照・整理しつつ、1970年代以降から起きているアメリカ経済の地殻変動が論じられている。経済グローバル化やロボット化、またそれに対応する政策の欠如によって、製造業の大幅な縮小、サービス経済化、雇用の非正規化、労働組合の弱体化、学歴を軸とした二極化などが進み、格差が拡大、階級が固定化し「アメリカン・ドリーム」が消滅しつつある現状が、豊富なデータや図表によって解説される。多国籍企業の利益最大化と自己実現に邁進する知識集約型の専門職エリートに対し、国民国家・経済の枠から抜け出せず、産業構造の変化に取り残された人々。なかでも特に白人中間層で広がる「絶望感」を指摘しつつ、「中産階級ラディカル」を不可避免的に生み出す21世紀型階級社会の構造を明らかにしている。

第2章「トランプ誕生の思想史的背景」は、「トランプイズム」と関わる重要な思

想的動向を確認し、後に続く4つの章を導入・概略するような章となっている。著者はまず、いわゆる「ネオコン」を中心とする戦後アメリカ保守の流れのなかで周縁化されてきた「もう一つの右翼／オルタナ右翼」として、トランプ現象を肯定的に捉える保守系知識人の存在と思想の系譜を（複雑な諸関係を示唆しながら）論じている。トランプ現象を現代アメリカ政治・知識社会がもたらした陥穽から抜け出す契機と見るこの保守派の思想は、ジェームズ・バーナム、サミュエル・フランシスを源流とし、「超国家」を形成するテクノクラート・エリートへの徹底攻撃と「ポピュリスト経済政策」、グローバリズム（自由貿易・移民受け入れ等）と共にエリートが推進する多文化主義への反発と白人民族主義などが特徴となっている。著者は更に、共和党、民主党の党略の転換や社会状況を辿りながら、白人労働者階級が両党から置き去りにされてきたと考える状況になった経緯を解説する。台頭する新しい保守派にとってこの白人中間層の困窮は民主主義や自由の危機であり、事態打破の闘いは階級権力闘争として認識されている。

第3章「策士バノンとオルタナ右翼」では、2017年8月に政権を去ったものの、白人労働層の票を掘り起こしたトランプ勝利の立役者で、現在でも保守政治の動きに強い影響力を持つスティーブン・バノンの思想的背景を通して、政治勢力「オルタナ右翼」の問題が考察される。著者はバノンの世界観を「①グローバル資本主義への不信と一種の階級闘争史観、②グローバル化現象の中での国家主権回復への強いこだわり、③制度腐敗と戦争前夜を強く意識するキリスト教終末論に近い時代認識と文明衝突観」（121）と分析する一方で、「人種差別主義」というイメージについてはバノンのメディア戦略の可能性も高いと指摘する。「オルタナ右翼」自体、定義が曖昧で、「＝人種差別主義者」という単純な位置付けができないほど多様なグループであるという。多文化主義のなかで西洋文明が貶められているという意識、白人文化優位の主張、主流右派への失望・怒りといったものは共通しているが、個別事案では対立もあるなど異なる複数の流れが入り込んでいる。先行する「トランプ＝バノン＝オルタナ右翼」の直線的印象に対し、バノン、オルタナ右翼の思想を詳細に辿りながら三者の関係の複雑さを示唆する章となっている。

第4章「多様性の発展と矛盾—多文化主義・PC論争」では、民主党やりベラル

派の推進してきた多文化主義の問題が、マーク・リラらのリベラル内部からの批判をもとに検討されている。トランプの暴言に喝采する政治・文化的反動は、アイデンティティ・ポリティクスの行き過ぎや過剰な PC 論争を黙認してきたリベラル派のある種の「自滅」の結果であり、リラは、自分の所属集団だけに専念する「ミーイズム」を超えた「公共性」や「共通性」の追求をリベラル派に促している。本章は、知識人による多文化主義・PC についての議論をその歴史的経緯を遡って解説、保守派アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』による文化相対主義批判にも言及しつつ、アーサー・シュレジンガー・ジュニア『アメリカの分裂』など 90 年代からすでに存在した類似の内部批判も詳述する。「小さな政府」や「自由市場」という題目で「個人化」を推し進めてきた戦後保守の主流派と同様、リベラル派もまたアイデンティティ・ポリティクスの「過激な個人主義」の遠心力によって行き詰まった状況にあることが示されている。

本書の最後の 2 つの章は、戦後アメリカ保守の歴史・経緯を、2 つの時期（1950 年代～90 年代冷戦終結の頃までとそれ以降～現在まで）に分けて丹念に検証し、今日の「トランプズム」や「もう一つの右翼」の登場に至った保守政治思想、特に知識人運動としての保守思想の複雑な背景に迫るものである。

第 5 章「戦後アメリカ保守思想—興隆から危機へ」では、大恐慌対策であったニューディール政策や第二次世界大戦への対応としての戦時統制による、政府の巨大化、市場管理、計画経済化といったアメリカの「左傾化」への反発から、戦後に複数の異なる保守思想のナラティブが登場するが、それがどのように発生し「主流派」を形成していったかが検討される。まず、フリードリヒ・A・ハイエク『隷従への道』（1944）の影響を受けたリバタリアン運動が勃興、ラッセル・カーク『保守主義の精神』（1953）を起点とする「伝統主義」が続き、両者は本来は相容れない要素を孕んではいたものの、「共通の敵」（国内にはルーズベルト型社会主義、国外には冷戦下の共産主義）への対抗から保守思想の合流が進行する。1960 年頃には左派から保守へと転じた「ネオコン」が流れ込み、レーガン政権誕生を支える大きな潮流となるが、高い知性と政策立案能力をもつネオコンが徐々に保守知識人界で優位となり、政治的影響力を強めていく経緯が説明されている。政治的動向に加

えて、ハイエクやエドモンド・バークの影響、ネオコンの思想とトロツキー運動の  
関係の議論など、前期のアメリカ戦後保守思想におけるヨーロッパ思想との密接な  
繋がりに大いに注目を向けた章となっている。

第6章「戦後アメリカ保守思想—分裂から破綻へ」は、保守内で優勢に立つネオ  
コン・グループが、湾岸戦争や911後のイラク戦争という形で、そのユニラテラリ  
ズム的外交政策（アメリカによる国際秩序の維持、アメリカ的価値観に基づく世界  
の形成＝他国の民主化・自由拡大）を実現し、政治における圧倒的影響・勝利を確  
実にしていく一方で、保守勢力内で対立・分裂が深まっていく状況を詳述してい  
る。湾岸戦争をめぐる保守内の論争でネオコンに敗れ、その他の保守派は周縁化さ  
れていくが、92年共和党予備選で予想外に健闘したパトリック・ブキャナンの主  
張は今日のトランプ大統領のそれと酷似していると筆者は指摘している。ネオコン  
主導の政治思想は911後のアフガン・イラク戦争への突入で頂点に達する。しかし  
戦争の泥沼化、思想運動における重鎮らの死去などによって空中分解的に衰退、反  
対にそれまで異端視されてきた様々な思想傾向が複雑に連動し「オルタナ右翼」運  
動として台頭、「ティーパーティ」はその大衆的衝動の表れの一つとして位置付け  
られている。筆者によれば、こうした保守の混乱に思想的整序と政治的方向性を与  
えようとするのが、トランプ現象を支持する新しい保守系知識人たちであり、保守  
派における内部対立の激化によって、アメリカ保守主義を根底から組み替える可  
能性があるという。本章ではまたネオコンと目されてきたフランシス・フクヤマの内  
部批判や、ネオコン、新保守派の双方が影響を受けているとされるレオ・シュトラ  
ウスの思想などにも議論が及んでいる。

トランプ大統領誕生によって顕在化した戦後アメリカの諸問題を検証する本書  
は、「トランプ現象」を、リベラルと保守の両方の政治・思想運動の限界や綻びの  
結果生じた混沌のなかで、大衆の不安や不満、衝動を取り込みながら、不定形に浮  
上・活発化したものと結論付けている。トランプ的ナショナリスト・ポピュリズム  
は、「一過性」のものでは決してなく、戦後以来の長期間に渡る経済・政治・文  
化・思想の展開によって舗装されてきた道の、ある種の到達地点であることが本書  
によって浮き彫りになっている。

欧米の様々な思想にも触れる本書に対して、哲学を専門とする研究者からは議論の不十分さを指摘する声がありうるかもしれないが、必ずしもその専門家ではない、本書の主たる読者層にとっては、アメリカにおける現実的、あるいは一般的なレベルでの受容の内容把握という意味では十分に有効であるように思われる。「トランプ現象」に内在する諸問題の複雑な関連性のため、本書ではそうした問題が各所で何度も繰り返し言及されるが、章ごとの主題に合わせて改めて解説されるという記述によって、簡単には「整理」できない錯綜する現状について読者の理解を助ける形になっている。多様な著作、分析、資料を元に著された本書はまた「トランプ現象」を読み解くための基本的文献の優れた紹介とも言えるだろう。前景化しやすいトランピズムの排他的・差別的攻撃性。しかしその背景に広がる根本的な問題、その歴史的意味や（不）可能性について多方面、多領域から検証することが、現代アメリカを理解するうえで不可欠となってくる。その意味で本書は、特に（評者のような）アメリカ政治思想や保守政治とは異なる専門分野の読者にとって、非常に有益な一冊である。